

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 現代日本語におけるオノマトペの意味拡張  
— 「CVQCVri」型を対象にして—

氏 名 陈 帅

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語におけるオノマトペの意味拡張に関する研究である。

従来、オノマトペは、形態と意味の間に有契性があることから、一般語彙とは異なる特殊な語群とされてきた。また、オノマトペは、五感と密接に関わるため、その意味の転用は、主に共感覚比喩の枠組みにおいて研究されてきた。共感覚比喩における修飾と被修飾の関係には、「一方向性仮説」が存在する。この「一方向性仮説」については、これまでに、反例の存在も指摘されているが、その要因は十分に考察されていない。そのため、「一方向性仮説」の反例の存在が「一方向性仮説」が成立しないことを意味するのか、もしくは、「一方向性仮説」自体が成立しつつ、共感覚比喩とは別の転用のプロセスがあるのかは不明のままである。そこで、本論文は、「CVQCVri」型のオノマトペ「こつてり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」を多義語として捉え、多義語分析により、オノマトペの意味のネットワークを明らかにすることを通して共感覚比喩を再考した。そのうえで、オノマトペの意味拡張には、感覚表現特有の共感覚比喩（2つの感覚による同時体験）に基づく転用と一般語彙と同じく比喩に基づく拡張が見られることを主張した。

第1章では、本論文の提起する問題と目的について触れ、「こつてり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の5語を分析・記述の対象とした背景について述べた。

第2章では、先行研究の概観を通して、本論文の考察対象の位置付けを明らかにした。まず、オノマトペの定義と分類を確認したうえで、特に「CVQCVri」型のオノマトペの音韻・形態的特徴及び統語的特徴を取り上げ、その特徴を確認した。その結果、本論文の考察対象には、オノマトペの典型例と言えるもの（こつてり、しっとり）もあり、オノマトペとして周辺的であり、一般語彙と見なせるもの（あっさり、さっぱり、すっきり）があることを示した。また、統語的特徴において、「オノマトペ+スル」動詞を取り上げ、「スル動詞」形成の要因と分類を見た。そして、本論文の考察対象が、「スル動詞」として働くときの統語的意味を確認した。次に、オノマトペの多義性と共感覚比喩に関する先行研究を取り上げ、その問題点を指摘して本研究の課題を整理した。本論文では、

共感覚を、「すっぱい匂い」のように、「ある感覚刺激を受けると同時に、異なる感覚刺激も受ける現象」と定義し、従来の言語学で言う共感覚比喻の中には、共感覚とは言えないものが含まれること、感覚間の転用ではあっても共感覚による転用と共感覚とは言えない転用の仕組みを解明する必要があることを述べた。本論文では共感覚に基づく転用だけを「転用」といい、それ以外を「拡張」として区別した。

第3章では、本論文が依拠する認知言語学の経験基盤主義、百科事典的意味について確認した。経験基盤主義はLakoff(1987)に基づき、百科事典的意味は初山(2010)に基づいて、その定義などを確認し、本稿の立場を示した。また、初山(2001)に基づき多義語分析の4つの課題を示し、初山(2005)に基づき類義表現の定義と種類を確認した。

第4章では、「こってり」と「あっさり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「こってり」「あっさり」にそれぞれ4つの多義的別義を認め、両語とも五感内の味覚的経験を表す意味をプロトタイプの意味として認定した。そして、多義的別義間の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。次に、五感内の意味転用に注目し、「味覚→触覚」(こってり/あっさりした感触)のような共感覚比喻の「一方向性仮説」の反例の存在、及び、「味覚→嗅覚」(こってり/あっさりした匂い)、「味覚→聴覚」(こってり/あっさりした音)などのような「一方向性仮説」に従う実例が非常に限られるということを指摘した。最後に、「こってり」と「あっさり」の反義関係を確認し、それが両語の使用の基盤となっている経験の対立によるものであることを述べた。「こってり」は、「重い」の経験基盤と同じく「ものが動きにくい」という身体的経験に基づき、すぐに解消されないものが「口の中」「目」「鼻」「肌」「耳」など五感の感覚器官、あるいは対象に「残る」と捉えられることを表した語であり、「あっさり」は、「こってり」と逆で、五感の感覚器官、あるいは対象に「残らない」と捉えられることを表した語であることを示した。

第5章では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「しっとり」に2つ、「さっぱり」に5つ、「すっきり」に4つの多義的別義を認め、「しっとり」は五感内の「触覚」的経験、「さっぱり」は五感的経験全体、「すっきり」は心理状態を表す意味をプロトタイプの意味として認定した。そして、多義的別義間の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。次に、五感内の転用に注目し、「視覚→触覚」(すっきりした感触)、「視覚→味覚」(すっきりした味)、「視覚→嗅覚」(すっきりした香り)など共感覚比喻の「一方向性仮説」の反例の存在、及び、「触覚→味覚」(しっとりした味)、「触覚→聴覚」(さっぱりした音)、「視覚→聴覚」(すっきりした音)など一方向性仮説に従う実例が非常に限られるということを指摘した。最後に、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の使用の経験的基盤を明らかにした。「しっとり」は、「潤い」があると感じられると、心が癒され穏やかな気持ちになるという経験を基盤としていることを示した。「さっぱり」と「すっきり」については、五感で感じられる対象や肉体感覚がよい状態になると同時に、心理状態がよくなるという経験に基づいていることを述べた。

第6章では、第4章と第5章の多義語分析を踏まえ、「あっさり」と「さっぱり」、「さっぱり」と「すっきり」それぞれの類義語分析を行った。「あっさり」と「さっぱり」は、「五感内の味覚的経験」と「人の性格」を表す意味、「さっぱり」と「すっきり」は、「五感内の視覚的経験」と「心理状態」を表す意味において、共通点を見出せる。「あっさり」と「さっぱり」は、同じベースを持っているがプロファイルに異なりがあり、「さっぱり」と「すっきり」は、同じプロファイルを持っているがベースに異なりがあることを説明した。

第7章では、オノマトペの意味拡張について考察した。本論文の考察により、オノマトペの意味拡張は、五感外と五感内の場合に分けられること、また、そのいずれもが基本的な比喻（メタファーやメトニミー）を基盤としていることがわかった。五感外の拡張は、一般語彙と同じく、純粋にメタファーやメトニミーによる拡張である。そして、五感内の拡張については、共感覚に基づく転用と一般的な比喻に基づく拡張がある。共感覚に基づく転用は、2つの感覚刺激を同時に受けるため、メトニミーを基盤としており、「一方向性仮説」が成立すること、及び、「一方向性仮説」に従わない拡張は、すべて共感覚ではなく、メタファーを基盤としており、一般的な比喻による拡張であることを主張した。

第8章では、本稿のまとめと今後の課題を提示した。

以上のように、本論文は、「こったり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」5つの「CVQCVri」型のオノマトペを考察対象とし、多義語分析を行い、その意味拡張を考察した。多義語分析により、オノマトペの意味のネットワークの階層構造を明示した。オノマトペの意味拡張の考察では、本論文で共感覚の再定義により、共感覚に基づく転用については、「一方向性仮説」が成立すること、また、従来説明されなかった「一方向性仮説」の反例となる転用は、共感覚ではなく、一般語彙と同様の比喻による拡張であることを主張した。